様式2　**令和5年度　清瀬市立清瀬第十小学校　　学校評価表**

学校教育目標

・豊かに感じ、よく考える子ども　・友達の良さがわかり、助け合う子ども　・心身をきたえ、明るく生きていく子ども

目指す学校像（ビジョン）

【目指す学校像】①児童にとって明るく楽しく安心できる学校
②教職員にとって明るく楽しく指導が行える学校
③保護者・地域と連携し信頼される学校
【目指す児童・生徒像】】自分を大事に、かかわりを大事に、今を大事に、未来を大事にする児童
【目指す教師像】児童に達成感を味わわせ、確かな学力・自尊感情を育ませることのできる教師

育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動

○育成を目指す資質や能力を「他者とのかかわりを通して、よりよく問題を解決できる力（協働問題解決力）」とした。それを実現させるために必要な能力を以下の4つとした。
・基礎的な力（言語、数量、情報スキル）　・他者と共に考える力（協働問題解決力、メタ認知）
・他者と共生できる力（人間関係形成力）・社会の中で実践する力（社会参画力、自律的活動力）
学ぶ楽しさ、分かった・できた喜びを感じられる授業の実践、自他の命を大切にする心情を育む教育の充実によって、育成すべき脂質や能力の実現を図る。
また、特色ある教育活動として、「図書館を使った調べる学習コンクール」を活用した情報活用能力の育成や養蚕体験や「赤ちゃんのカプロジェクト」を通した命の学習に取り組んだりする。

前年度までの学校経営上の成果と課題

成果　健やかな心の育成では、取組指標・成果指標それぞれ全ての項目が「4」となっており、学校関係者評価でも信頼と期待された御意見をいただいている。また、確かな学力の向上における児童の思考・判断・表現力を育成するための授業改善、豊かな心の育成におけるいじめへの対応、本校の特色における体験的な活動の充実も、取組指標・成果指標、それぞれの項目が「4」となっており、総じて安全・安心な学校として教育活動が展開されている。
課題　取組指標は「4」であるが、成果指標が「2」であった項目は特別支援教育の充実として定めた「保護者やSCと連携しながら児童の実態や指導方法を共有し、実践の振り返りを行う。」、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や環境の工夫・改善を行う。」であった。友人関係や日常生活において継続して気を配ったり、個に応じた学習指導を継続して行ったりする。また成果指標の評価規準が厳しかったので、その見直しを図る。

柱	具体的方策	自己評価 評価 取組指標	自己評価 評価 成果指標	自己評価 課題及び次年度以降の改善方策（案）	学校関係者評価 学校関係者による「自己評価」についての評価	次年度以降の改善方策 学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策
確かな学力の向上	各学期に1回、本を活用して課題を追究する授業を実践し、情報活用能力の育成を図る。	4	3	課題　児童アンケートでは、76%の児童が肯定的な回答を示しているが、保護者アンケートでは56%が否定的な回答を示している。家庭では本を使って調べている児童が少ないので、学校での取組みを知らせる必要がある。 方策　家庭に向けて、本を活用する学習活動の実践をお便りやホームページで積極的に発信する。	児童の肯定的な回答が多いことは高評価に値する。本を活用した学習活動をすることで、十小の図書館の本も充実してくるのでよい。また、保護者が働きに出ている家庭も多く、調べ学習をする際に、図書館へ行く時間を確保できない現状もある。	学校の図書館の資料を今後も充実させていく。また、家庭に向けて、本を活用する学習活動の実践をお便りやホームページで積極的に発信する。
	東京ベーシックドリルを活用して、国語算数の基礎基本の定着を図る。	4	3	課題　児童アンケートで25%の児童が「東京ベーシックドリル」だけでは学習内容が身に付かないと感じている。学力が十分に身に付いていない児童に対して更なる定着を図る必要がある。 方策　東京ベーシックドリル学習に加えて、授業時間内や家庭学習でのプリントの反復練習も取り入れる。	ベーシックドリルは繰り返し行うことで、定着していく。ドリルパークはゲーム性もあるので楽しんでできる点はよい。ベーシックドリル以外の教材もあるので、紙の教材も含め、児童に合わせて選択して補充していくのがよい。	東京ベーシックドリルを使った学習に加えて、授業時間内や家庭学習でのプリントの反復練習、ドリルパークの活用は引き続き行う。さらに、児童に合わせて復習用の教材を選択できるように準備する。
豊かな心の育成	月1回の高学年児童を中心とした挨拶運動を行わせたり、学期に1回、児童に挨拶をする意味や価値を考えさせたりする。	4	4	課題　児童アンケートで87%の児童が「自分からすすんであいさつしている」と回答している。自主的に挨拶することが苦手な児童がいるので、個別に指導することが必要である。 方策　月1回の挨拶運動を輪番制で全学年で実施し、児童が主体的に挨拶できるようにする。	まずは、大人が挨拶する姿を児童に見せていくことが大切である。先生方から保護者へ積極的に挨拶していただいているので継続できるとよい。児童のアンケート結果から努力を感じる。子供たちが主体的に、笑顔で目を合わせて挨拶ができたらよい。	月1回の挨拶運動を輪番制で全学年で実施し、児童が主体的に笑顔で目を合わせて挨拶ができるようにする。
	学級指導・道徳の授業を通じていじめ未然防止教育を行う。児童の振り返りアンケート、ふれあいアンケートを定期的に実施し、児童が相談しやすい体制を整える。	4	4	課題　いじめを発見し、解決することができた。今後もトラブルの早期発見、解決に努めることが必要である。 方策　今後も継続して、ふれあい月間アンケート6・11・2月、児童の振り返りアンケート7・12月を実施したり、いじめ防止対策委員会を開いたりして、対応策を考え実行し、学校全体で組織的に対応する。	取組指標、成果指標ともに4がついているので、先生方の努力の成果である。今後も継続していただきたい。家庭がしっかりと子供の目を見て話をしているかということも大切である。	いじめの早期発見、解決に向けて、以下の点について組織的に取り組む。 ①ふれあい月間のアンケートの実施（6月、11月、2月） ②ふり返りアンケートの実施（7月、12月） ③いじめ防止対策委員会（適宜）
健やかな体の育成	体育指導の工夫改善、1学期に体力テストの練習を実施し、数値的体力向上を目指す。また、体力向上旬間を各学期ごとに実施する。	4	4	課題　体力向上旬間（サーキット、縄跳び、持久走）を行い、児童の体力アップに繋がる取組みができたが、十分な数値の成果が出ていないので、全国平均に近づけるように努めることが必要である。 方策　今後も体力テストの練習や体力向上旬間の取組みを継続したり、前年度の体力テストの結果と比較したりして、児童が体力向上を実感できるようにする。	体力向上に繋がる運動に年間を通して取り組んでいてよい。1学期の体力テストに向けての練習はやってよかった。体力テストの数値が上がると、児童の意欲も高まるので、今後も継続していただきたい。	体力向上に繋がる運動に年間を通して取り組む。体力テストに向けた練習や体力向上旬間の取組を継続したり、前年度の体力テストの結果と比較したりして、児童が体力向上を実感できるようにする。また、高学年においては、専門家を招いた体力テスト活用の授業を実施し、運動意欲の向上を図る。
	登下校のマナーや廊下歩行の仕方を指導し、安全に生活する態度を養う。	3	4	課題　児童アンケートで93%の児童が「安全に気を付けて行動できている」と回答しているが、校内では廊下を走ってしまったり、登下校の際に道路で広がって歩いてしまったりする児童がおり、指導が必要である。 方策　登下校や廊下歩行のマナーについて担任は継続して指導したり、学校支援本部を中心に地域の人材を集めて下校の安全指導をしたりする。	登下校の時間帯に通学路を通ると、道路の真ん中を歩いている児童を見かける。また、家庭にも登下校のマナーを指導する必要がある。学校近隣で工事も多く実施されていた。登下校時の見守りについては、学校と連携しながら取り組んでいただきたい。	廊下歩行のマナーについて担任は継続して指導するとともに、登下校の仕方については、担任の指導だけでなく、家庭に対してもお便りや保護者会で周知する。また、学校支援本部を中心に地域の方々に呼び掛けて下校の安全指導をする。
特別支援教育の充実	特別支援に関する研修を行った上で、学級ごとにユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業や環境の工夫・改善を行う。	3	2	課題　1学期のアセスでは、要学習支援領域に31名存在したが、2学期は32名となり、学習の困り感をもつ児童の増加人数を抑えることが必要である。 方策　ユニバーサルデザインの研修を行い、UD視点を取り入れた授業改善を図ると共に、評価基準の見直しを図る。	アセスの学校全体は1名の増加ではあるが、人数が減った学年もある。それは評価すべき点である。また、学習内容が学期は進むにつれて難しくなる点を考えると、評価基準の見直しは図った方がよい。	ユニバーサルデザインについての研修を行い、UD視点を取り入れた授業改善を図る。また、アセスの結果において、合計人数の増減ではなく、同じ児童が年間を通して要学習支援領域にいないかどうかを見るなど、評価基準の見直しを図る。
	特別支援学級開設に向けて児童や保護者向けの資料を作成し、周知する。理解促進のための啓発活動を行いながら、相談体制を整える。	4	3	課題　児童アンケートでは93%、保護者アンケートでは72%の児童・保護者が肯定的な回答を示しており、特別支援学級開設に向けて、更なる周知を図る必要がある。 方策　特別支援学級に関する組織や学習内容、学校生活の様子などをまとめたリーフレットを発行する。	特別支援学級開設に向けた周知により、保護者の間で児童の特性に応じて特別な配慮を要する場合について話題になるなど、特別支援教育への関心は高まっていると思う。	保護者に向けて、更なる周知を図るため、特別支援学級に関する組織や学習内容、学校生活の様子などをまとめたリーフレットを発行する。
本校の特色	蚕学習、赤ちゃんのチカラプロジェクト、認知症サポーター養成講座、松竹梅＋科学の力向上プロジェクト、石田波郷俳句大会出前授業、保育園・幼稚園との交流等、体験的な活動を実施する。	4	4	課題　各学年が体験的な活動に取り組み、児童の意欲を高めることができた。また全学年で「石田波郷俳句教室」を行い、俳句大会への投稿と連動させた授業を行うことができた。今後も児童の興味関心がさらに高まるような体験的な授業を取り入れていくことが課題である。	児童は体験的な活動について、家庭でも話をしているので、印象に残っている授業である。今後も継続して行っていただきたい。	来年度も引き続き、児童が興味をもつような体験的活動を多く取り入れる。
	学校支援本部と連携して、地域に根ざしたボランティア活動を実施する。	4	4	課題　学校支援本部と連携しながら、ボランティア活動を年間合計31回実施することができた。今後も児童のためになるようなボランティア活動を取り入れていく。 方策　児童のためになるようなボランティア活動を実施できるように計画を立てる。	夕涼み会、焼き芋の会など様々なことに取り組めた。年間31回は評価すべき回数である。学校支援本部には、子供たちが参加できる活動を今後も取り入れていただきたい。	学校支援本部と連携しながら、児童のためになるようなボランティア活動を実施できるように計画を立てる。